

KITAYAMA SYOUBUZAWA-B SITE

北山菖蒲沢B遺跡

— 平成 7 年度県営圃場整備事業芹ヶ沢地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1996. 3

茅野市教育委員会

北山菖蒲沢B遺跡

— 平成 7 年度県営圃場整備事業芹ヶ沢地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1996. 3

茅野市教育委員会

序 文

北山菖蒲沢B遺跡の緊急発掘調査は、県営圃場整備事業芹ヶ沢地区に伴うものです。発掘調査による記録保存は茅野市教育委員会文化財調査室により行なわれました。

北山菖蒲沢B遺跡のある芹ヶ沢区、金山区は古くは明治・大正時代の考古学者鳥居龍藏氏の著作にもとりあげられ、地元在住の方々をはじめとする多くの人々の手によりたくさんの遺跡が発見されてきました。考古学研究史上にその名を残す神ノ木遺跡や下島遺跡もこの地域に残された遺跡です。宮坂英式氏や戸沢充則氏、松沢亜生氏などの考古学者により調査が行なわれ、縄文時代前期の土器型式である「神ノ木式土器」、「下島式土器」の標式遺跡として広く知られています。

北山菖蒲沢B遺跡は近くに湧水をもち、八ヶ岳山麓に広がる尾根に営まれた典型的な縄文時代遺跡です。遺跡から出土する土器や石器などとともに、おそらく縄文時代以来ひきつがれて來たであろう郷土の景観としても本遺跡は価値のあるものであると思います。発掘調査を行なうにあたり、遺跡の内容とともに現在私たちが目にしている景観をも含めた調査を心がけていきたいと思います。

北山菖蒲沢B遺跡の調査は来年度も引き続き行なわれます。縄文時代以来の人間の生活の歴史は、ひとつひとつの遺跡の地道な調査によって明らかにされていくものです。北山菖蒲沢B遺跡の周辺には未だ多くの遺跡が残されています。今年度の調査成果を他の遺跡や他の地域の資料とともに活用していただきながら、我々の祖先の歴史を皆さんとともに考えていいきたいと思います。

発掘調査にあたり長野県教育委員会、地元地権者の皆様、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市農業基盤整備課をはじめ、調査にかかわった多くの皆様の深いご理解とご助力を得て、今年度の発掘調査を終了することができました。心からお礼申し上げます。

平成8年3月

茅野市教育委員会
教育長 両角 徹郎

例　　言

1. 本書は長野県諫訪地方事務所長大西一郎と茅野市長矢崎和広との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財調査室が実施した平成7年度県営圃場整備事業芹ヶ沢地区に伴う、北山菖蒲沢B遺跡の発掘調査報告書である。
2. 北山菖蒲沢B遺跡は、長野県茅野市北山7653番地他に所在する。
3. 発掘調査は、長野県諫訪地方事務所よりの委託金と文化財国庫補助並びに県費補助を得て、茅野市教育委員会文化財調査室が実施した。調査の組織、名簿は第I章第2節4に記載した。
4. 発掘調査は平成7年5月30日から7月7日にかけて行ない、出土品の整理および報告書作成は発掘調査終了後より平成8年3月まで行なった。
5. 本報告に関わる出土品と諸記録は茅野市教育委員会文化財調査室に収蔵、保管している。
6. 本報告書の編集、執筆は功刀 司が担当し、遺構実測図のトレース、図版作成作業は功刀と赤堀彰子が行った。

目　　次

序　文	茅野市教育委員会教育長　両角　徹郎
例　言・目　次	
第I章 発掘調査の概要	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過	1
第2節 発掘調査の方法と経過	2
第II章 遺跡の概観	4
第1節 遺跡の立地と地理的環境	4
第2節 周辺の遺跡	4
第III章 発掘された遺構	7
第1節 遺跡の土層	7
第2節 先土器時代の遺構	9
第3節 繩文時代の遺構	10
第IV章 ま　と　め	21
引用参考文献	22
図　　版	
抄　　録	

第Ⅰ章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査に至るまでの経過

本遺跡については、茅野市教育委員会発行の遺跡地図にその所在が記載され周知の遺跡となっていたが、茅野市芹ヶ沢地区における圃場整備事業が進展する中、本遺跡の所在地が平成7年度に圃場整備事業地にあたることとなり、埋蔵文化財に関する保護協議が必要となった。茅野市教育委員会文化財調査室は平成6年度の保護協議に基づき試掘調査を行なった。この試掘調査は遺跡内の土層堆積状況と遺跡の内容を把握することにより、遺跡保護の可能性を検討するための調査であった。試掘調査前の段階では、本遺跡の範囲は谷の東側の尾根に限られていたが、試掘調査直前に西側の尾根上に縄文時代の遺物が分布していることが明らかとなり、急速調査対象範囲の見直しを迫られた。試掘調査の結果、西側の尾根からは先土器時代の遺物と縄文時代早期押型土器、中期初頭および中期末葉の土器、石器が出土し、縄文時代の住居址と土坑が分布することが明かとなった。

平成7年1月11日に、長野県教育委員会、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市農業基盤整備課、茅野市教育委員会文化財調査室により本遺跡の保護についての協議が行なわれた。その結果、遺跡の保護については、発掘調査による記録保存が図されることになった。本遺跡の調査範囲については、他遺跡の調査範囲が縮小したこともあり、東西の2つの尾根にまたがる遺跡範囲の全面を発掘調査することになった。調査費については、試掘調査の結果に基づき積算することとした。茅野市教育委員会ではこの日程変更に対応し、予算措置を行ない調査に備えた。

平成7年度5月1日付で埋蔵文化財発掘業務委託契約書を取交わし、圃場整備事業工程との関係から西尾根の発掘調査を開始した。調査が進む中、圃場整備事業の設計変更により、再度調査日程と調査範囲の見直しが必要となった。

平成7年6月30日に再度保護協議が行なわれ、圃場整備事業の工程と他遺跡調査との日程調整を図った結果、本遺跡については、当初遺跡全面が調査対象範囲であったところを西尾根のみに変更し、東尾根については平成8年度に調査を行なうこととなった。この時点で北山菖蒲沢B遺跡は西尾根調査がほぼ終了し、遺構実測作業に入っていた。

長野県教育委員会は、保護協議の結果に基づき平成7年11月15日付7教文第7-10 15号平成7年度県営圃場整備事業（茅野市芹ヶ沢地区）にかかる埋蔵文化財の保護について（通知）を提出した。それによると北山菖蒲沢B遺跡の保護については、事業地内にかかる1,490m²以上を発掘し記録保存を図るというものであった。この通知に基づき、平成7年12月20日付をもって埋蔵文化財発掘業務変更委託契約書を取交わし、調査費用3,100,000円（農政部局負担2,805,000円、文化財部局負担294,500円）で事業を行なうことになった。

第2節 発掘調査の方法と経過

1. 発掘調査の方法

平成5年12月に試掘調査を行なった。西尾根についての調査面積は遺跡範囲約20,000m²の内、今年度本調査面積1,140m²、西尾根試掘面積350m²である。本調査範囲は試掘調査の結果に基づき設定した。試掘調査により、遺跡内基本土層第3層上面で遺構が確認できることが判明していたこと、先土器時代の遺物が出土したことにより遺構検出作業を2回に分けて行なうこととした。試掘調査において先土器時代遺物は第4層と第5層の境界面から出土していることから、重機による表土剥ぎ作業を第3層上面までとし、第3層以下はグリッド単位で適宜掘り下げ調査を行ない遺構の有無を調査した(第2~4図)。大部分の遺構は第3層から第5層上面で検出され、掘り下げ調査により第6層上面で検出された遺構として第26号土坑がある。北側斜面には黒褐色土層が厚く堆積しており、この黒褐色土層下部より集石が検出されたが、重機による表土剥ぎ作業において上半部を破壊してしまった。

遺構の実測は平板測量により行なった。遺構の記録は縮尺1/20とし、必要に応じ1/10の微細図を作成した。グリッドは任意に設定し、このグリッド網をもって遺構記録の基準とした。グリッドは2m間隔で設定した。

遺物出土位置の記録については遺構により方法が異なる。第1号住居址は試掘調査により覆土の一部を削平してしまったものの、遺存状況は良好であると判断されたため、できる限り遺物出土位置を記録するよう努めた。土坑から出土した遺物については調査期間を考慮し、遺構単位に取り上げるに留めた。土坑覆土の中での遺物分布に偏りが見られた場合は覆土の層位を単位として取り上げることとした。遺構外出土の遺物については、先土器時代遺物の出土が予想されたこともあって出土位置の記録を行なったが、縄文時代の遺物が少量出土したのみである。

2. 遺物整理と報告書作成の方法

遺物整理では遺物の洗浄と注記作業を行なった。遺物の整理と分析、報告業務は他遺跡調査のため、十分な時間が得られず、今回の報告では省略せざるを得なかった。そのため本遺跡の性格を明らかにしたとは言い難い報告となつた。遺物の詳細に関しては、来年度調査の成果とともに後日明らかにしていただきたい。なお本報告書の石器の記述のうち、剝片あるいは碎片と記したものは堆積岩、火成岩を素材とするものである。黒曜石を素材とする剝片である場合石質を付して記述している。

3. 調査日誌(抄)

5月30日(火) 晴 重機表土剥ぎ作業。住居址1基を検出した。

6月6日(火) 晴 遺構検出作業。土坑9基を検出した。土坑半裁調査を開始する。

6月12日(月) 曇 グリッド設定。第2号住居址平面形の検出。第2号住居址の平面形が確定できない。埋甕、焼土が検出されたことから床面が漸移層にあるものと予想された。第1号焼土および周辺を調査する。テントを設営した。

6月13日(火) 雨 発掘調査現場作業中止。室内で図面整理、遺物注記作業を行なう。



△表土剥ぎ作業風景

6月14日（水）曇のち雨 午前中は第1号住居址調査およびグリッド掘り下げ調査を行なう。雨がふりだしたため、作業員は午前中のみで作業中止。午後、補助員は図面作成とグリッド設定作業を行なう。調査員はグリッド設定と遺構観察を行なう。

6月15日（木）曇のち雨 午前中は、茅野市八ヶ岳総合博物館指定学級として豊平小学校6年生45名が発掘調査体験学習を行なう。午後雨のため現場作業を中止する。第1号住居址の炉址が検出された。

6月16日（金）曇時々晴 前日に引き続き午前中は茅野市八ヶ岳総合博物館指定学級。湖東小学校6年生47名が発掘調査体験学習。午後は第1号、第2号住居址の調査を行なう。第1号住居址の遺物分布がほぼ把握できた。

6月23日（金）雨時々曇 第2号住居址埋甕実測作業、遺物取り上げ作業、第1号集石実測作業と礫の取り上げ作業を行なう。途中雨のため作業を中断する。

6月30日（金）晴 遺構調査が終了する。グリッド掘り下げ調査を継続する。調査員と調査補助員は遺構実測作業を行なう。器材撤収を開始。

7月7日（金）遺構実測作業を終了し測量器材を撤収。



△八ヶ岳総合博物館指定学級



△第1号焼土調査風景

4. 調査組織

調査主体者 両角昭二（H 7.4.1～H 7.9.30 在任）

両角徹郎（H 7.10.1より）

事務局 宮下安雄（教育次長）

文化財調査室 両角英行（室長） 鵜飼幸雄（係長） 守矢昌文 小林深志（尖石考古館学芸員兼務）

大谷勝己 小池岳史 功刀司 百瀬一郎 小林健治 柳川英司 大月三千代

調査担当者 功刀司 小林健治

調査補助員 宮坂光昭 赤堀彰子

発掘調査・整理作業参加者

伊藤一実 伊藤京子 伊藤てる 伊藤益郎 伊東みさを 今井寿恵子 柿沢みゆき

小平久子 白旗スエ子 立木利治 立岩貴江子 馬場きん子 保科常夫 宮坂節 宮嶋勝

宮嶋ユキ 目黒恵子 柳平たい 柳平高好 柳平文 渡辺さち 渡辺つる子

第II章 遺跡の概観

第1節 遺跡の立地と地理的環境

北山菖蒲沢B遺跡は長野県茅野市北山7653番地他に所在する(第1図)。芹ヶ沢区および金山区の南東の方に向にあたり、一帯は水田、畑が広がる耕作地帯となっている。付近には湧水が豊富であり、現在も淡水魚の養殖や飲料水などに用いられている。北山菖蒲沢B遺跡が位置する場所は畠地として利用されていた。

北山菖蒲沢B遺跡は、渋川渓谷から南約600mに位置している。八ヶ岳山麓と霧ヶ峰南麓は渋川によって区分されるが、北山菖蒲沢B遺跡の所在地は八ヶ岳西麓の端にあたる地域である(図版1-1)。遺跡からは渋川渓谷越しに霧ヶ峰南麓一帯が一望でき、西には八ヶ岳山麓に特徴的な南北方向に伸びる尾根が連続している。遺跡は湧水を取り囲む尾根上に広がっている(図版1-3)。今年度調査した地点はこの湧水点よりみて南西の尾根上に立地する。遺跡は尾根平坦部分より斜面にかけて広がっているが、尾根南側は道路建設、開田工事により削平されており(図版1-2)、調査により捉えられた遺構の広がりは遺跡全体の一部に限られるものと思われる(第2図)。今年度調査地点をはさむ谷は南北で地形が異なっており、南側の谷は谷幅が狭く深いが、湧水点のある谷は浅く凹んだ形状である。2筋の尾根は湧水点南側で連続しているが、湧水点のある南側斜面には遺構はみられなかった。谷南斜面ではローム面の急激な落ち込みが確認され、谷内には黒褐色土が厚く堆積していた。

第2節 周辺の遺跡

北山菖蒲沢B遺跡が所在する茅野市北山地区芹ヶ沢区から湖東地区にかけての地域は、遺跡の分布密度が高いだけでなく、今までに発見された遺跡の分布状況からいくつかの遺跡群に分離できる可能性が高く、考古学による地域研究の場としては最適な場所の一つであると言える(第1図)。縄文時代前期土器型式の様式遺跡として著名な神ノ木遺跡(No53)、下島遺跡(No56)もこの地域に残された遺跡である。

北山菖蒲沢B遺跡の周辺では、多くの遺跡が谷を隔てた尾根上に隣接して分布する。今年度調査地点の北に北山菖蒲沢A遺跡(茅野市遺跡台帳 No235)が接するように広がり、北山菖蒲沢A遺跡の西に平成6年度に発掘調査が行なわれた広井出遺跡が、東の尾根上には山之神沢遺跡(No234)が立地している。

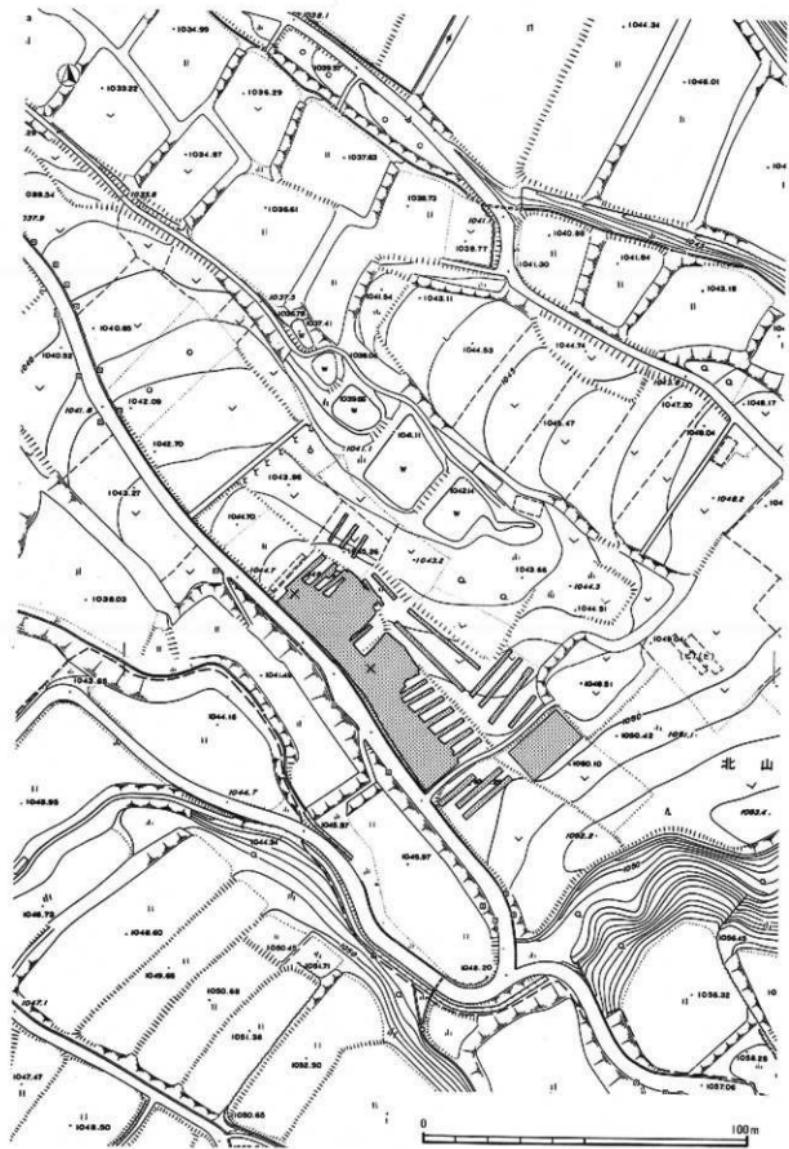
これらの遺跡では先土器時代から縄文時代早期にかけての生活痕跡が見出される。広井出遺跡(No236)において縄文時代住居址の覆土から先土器時代の遺物が出土しているが、遺物ブロックなどの遺構は検出されていない。北山菖蒲沢Bからやや離れた北山長峰遺跡(No50)でもナイフ形石器が採集されている。

縄文時代早期に入ると押型文土器が広井出遺跡、北山菖蒲沢A遺跡、北山菖蒲沢B遺跡で出土し、縦状体圧痕文を施す土器が広井出遺跡、北山菖蒲沢A遺跡で出土するなど多くの遺跡から遺物が出土している。広井出遺跡からは集石七坑と分類された土坑が2基検出されている。第23号土坑から押型文土器が、第1号七坑からは縦状体圧痕文土器が出土し、第23号土坑からは特殊磨石が出土している。これらの遺構が早期に属するか否かは今後の検討に委ねるとしても、周辺の遺跡からも遺物の散布ばかりでなく縄文時代早期の遺構が検出される可能性が高いことを示すものであると考えられる。

堅穴住居址を伴う遺跡は、縄文時代早期終末から前期前半の広井出遺跡に始まり、北山菖蒲沢A遺跡の縄文時代前期末葉から最終末を中心とする集落遺跡が検出されている。前期末葉の遺物が広井出遺跡にも散布



第1図 北山菖蒲沢B遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)



第2図 北山菖蒲沢B遺跡周辺の地形 (1/1,500)

していることから、この時期には集落遺跡ばかりでなく様々な類型の遺跡が尾根ごとに分布している可能性がある。縄文時代前期に続く縄文時代中期初頭の堅穴住居址が北山菖蒲沢B遺跡から見つかり、中期中葉の集落遺跡としては北山長峰遺跡、中期後半の遺跡としては北山長峰遺跡、聖石遺跡(No51)、北山菖蒲沢A遺跡、北山菖蒲沢B遺跡があり、難読性は未確認ではあるが時期が近接すると思われる遺跡が近距離に集中している。

縄文時代後期では、広井出遺跡の第59号土坑から縄文時代後期前半の土器が出土している。また『諫訪市第一卷』の地名表に田實寅郎氏所蔵資料として旧北山村芹ヶ沢ベック草発見の薄手式土器が記載されていることから、本遺跡周辺に縄文時代後期の遺跡が残されている可能性があり、今後その所在について注意する必要がある。

弥生時代以降の遺跡は八ヶ岳西麓の他の地域と同様はほとんどみつかっていないが、本遺跡からやや離れた下島遺跡から弥生時代後期の住居址が発見された他、磨製石器が単独で出土した地点が散在する。この様な遺跡のあり方から、この地域を含めた八ヶ岳山麓は遺跡数こそ少ないながら、弥生時代の獵場などとして利用されたものと考えられている。

平安時代の遺跡として北山菖蒲沢A遺跡、北山菖蒲沢B遺跡がある。両遺跡から住居址がそれぞれ1基づつ検出されており、他の八ヶ岳山麓と同様、尾根ごとに小規模遺跡が広がっていた様子がうかがえる。近年八ヶ岳山麓の茅野市農平、根木地区における発掘調査の成果をもとに、尾根上に点在する平安時代住居址を対象とした研究が進んでおり、一見孤立しているかの様な分布状況をみせる遺跡の学術的価値が高まっている。

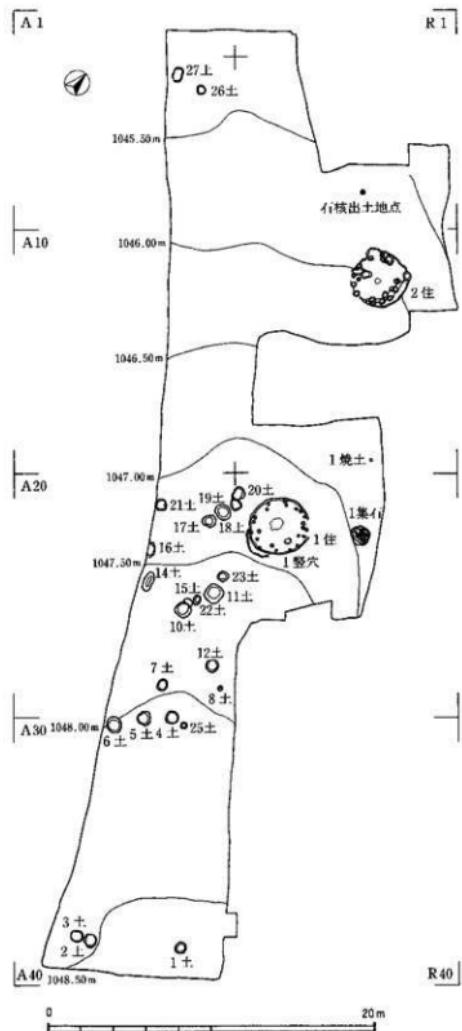
第III章 発掘された遺構

第1節 遺跡の土層

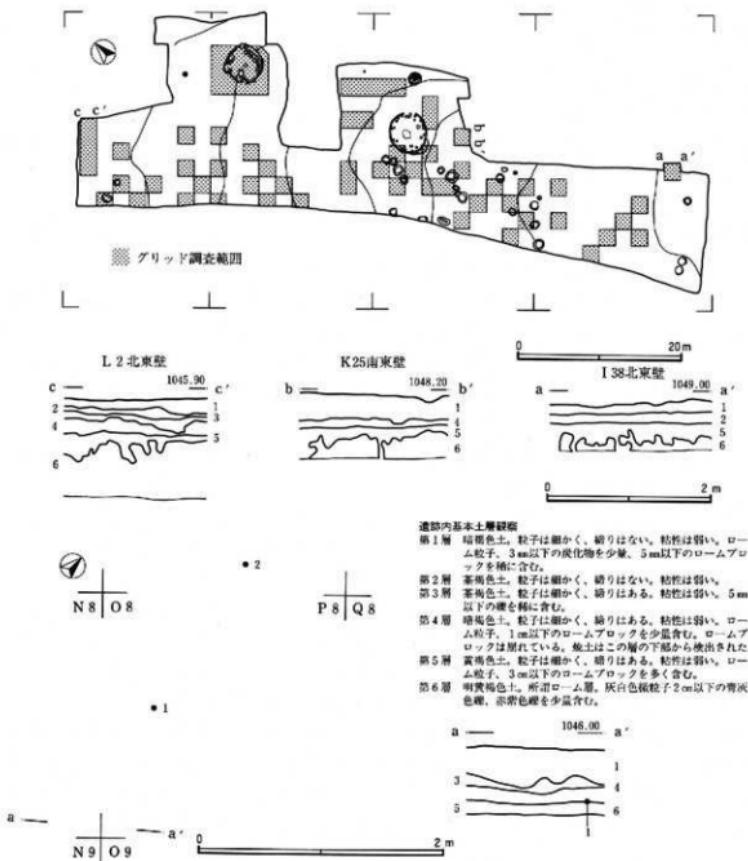
本遺跡の遺構外にあたる地点では6つの土層が観察された(第4図)。尾根先端部に向うほど耕作などによる擾乱が比較的少なく、第3層、第4層が確認できる堆積状況であった。土層の特徴として、第2層と第3層にはロームブロックが含まれていないに対し、第4層と第5層にはロームブロックが観察された点があげられる。特に第5層にはロームブロックが多く含まれ第6層との境界が乱れることから、第5層は第6層が擾乱され形成されたと考えられる。第1号焼土周辺の北東向き斜面においては、黒褐色土層が湧水点のある谷に向って厚く堆積している(第7図)。黒褐色七層は第3層の上位に位置する。

この黒褐色土層から疎と縄文時代中期初頭の土器がわずかながら出土しており、他の土層では観察されなかった炭化物が少量含まれている。炭化物は耕作土と黒褐色土層以外の土層では観察できなかった。第3層以下の土層における遺構外出土の遺物は少なく、遺構外グリッド調査において縄文時代の遺物が第3層、第4層から散発的に出土し、先上器時代の遺物が第4層下部から出土したのみである。縄文時代の出土遺物は黒曜石製石器と打製石斧破片、中期初頭および時期不明の上器破片である。

縄文時代の遺構のうち大部分は、第3層上面から第4層上面で検出された。例外として第1号集石の礎上面と第1号焼土の焼土上面が第3層上位にあたる黒褐色土層から確認され、第27号土坑は第5層下部で検出された。第3層、第4層における遺物出土状況と第1号集石、第1号焼土の検出位置から、縄文時代の生活面は黒褐色土層から上位にあり、耕作などにより破壊されてしまったものと考えられる。



第3図 北山菖蒲沢B遺跡遺構分布図 (1/400)



第4図 北山菖蒲沢B遺跡グリッド調査範囲(1/600)と遺跡内基本土層(1/60)、第1号ブロック(1/40)

第2節 先土器時代の遺構

第1号ブロック（第4図）

検出状況 試掘調査時に石核が出土している。周辺の精査とグリッドの掘り下げ調査を行なったが（第4図）、遺物ブロックの広がりは認められなかった。

遺構の構造 遺物は遺跡内基本土層第4層下部より出土した。

遺物の出土状況 石核1点と剝片1点がやや離れた位置から出土した。周辺の耕作土からも黒曜石製剝片・碎片が出土したが先土器時代の石器とは考えられない。

第3節 繩文時代の遺構

1. 住居址

第1号住居址（第5図、図版2-1～4）

検出状況 尾根K22グリッド周辺に位置する（第3図）。試掘調査時には遺跡内基本土層第4層下部で確認され、本調査時には第3層で検出した。このため遺構の遺存状況が比較的良好な状態で調査することができた。但し、覆土上位の一部に擾乱が認められ、また壁の一部は試掘調査時に破壊した。

遺構の構造 平面形は円形であるが東西方向にやや長く梢円形に近い。長径5.03m、短径4.82mを測り、壁は最大で35cm遺存していた。遺構覆土は2層に分層できる。

主柱穴は、掘り方と深さからみてP₂からP₄であると考えられた。壁下には支柱穴が巡る。支柱穴はほぼ等間隔に配置されているが、北壁下から東壁下で支柱穴間の距離と壁からの距離が乱れている。

炉址は住居址中央のやや西寄りから検出された。炉址の周囲にはブロック状の焼土が形成されている（図版2-3）。焼土の下部より炉址掘り方の一部と考えられるピットが2基検出された。土層断面の観察によれば、炉址ピット2を中心広がる焼土ブロックが炉址ピット1を覆った状態であった。かげ1は掘り方のみが残され、炉址2には大形の土器破片が埋設されていた。この土器片は炉址中央に立てられた状態で検出されており、土器片内部の土層と外部の土層は色調、含有物が明らかに異なっている。炉体土器と焼土の遺存状況からみて、炉址の作り替えが行なわれたものと考えられる。

主柱穴間の距離と炉址の作り替えから、主柱穴P₂からP₄の7基が同時に機能していたわけではなく、一部建て替えられた可能性が大きい。分布状況から考えると、P₂・P₃・P₄・P₅・P₇の5本と、P₂・P₃・P₄・P₅・P₆・P₇の6本の2組の主柱穴配置があったものと考えるのが妥当であると思われる。ただし主柱穴配置の新旧関係は不明である。

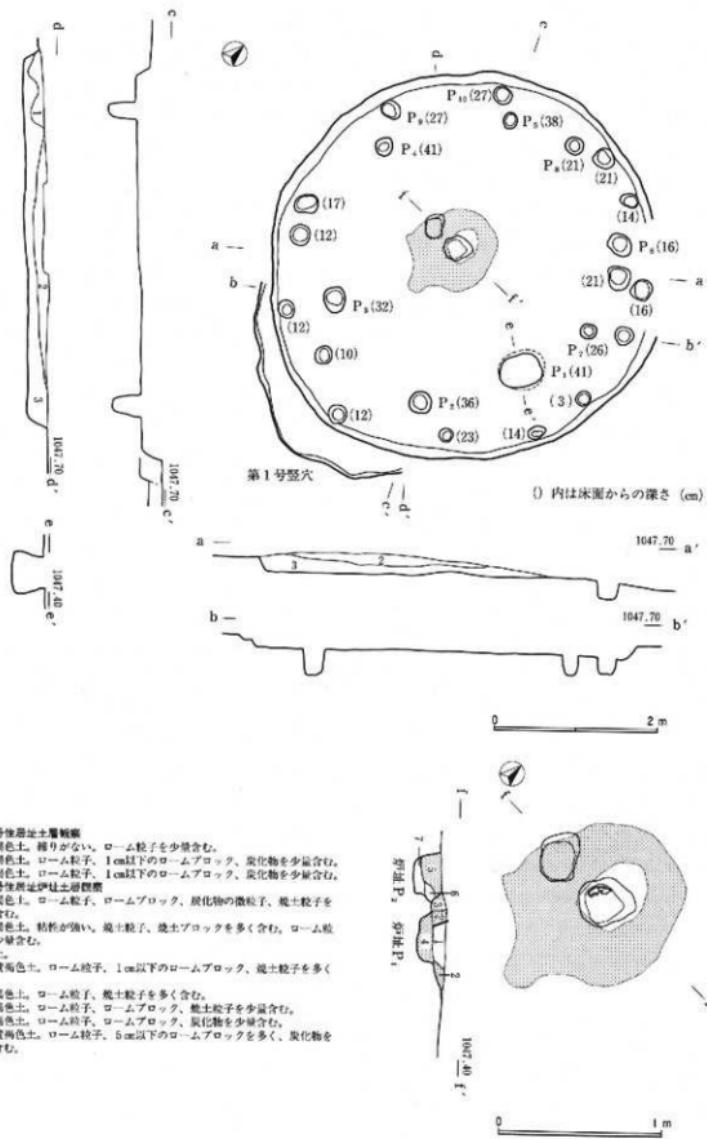
床面は遺跡内基本土層第5層上面から第4層中に設けられており、第5層上面ではやや堅硬である部分が認められたが、第4層中では全体に軟弱であった。壁の立上がりは緩く渦曲している。

住居址南東側の主柱穴P₂とP₇を結ぶ線上から断面フ拉斯コ型の土坑が検出された。土坑覆土には材の断片と思われる炭化物が多量に含まれていた。炭化物の中で形状が記録できるものはない。

遺物の出土状況 遺物は住居址南側の第2層に集中する。遺物の多くは土器破片、黒曜石剝片、碎片であり、個体土器、石匙など遺存率が良いものも含まれるが大部分に欠損部分が認められる。石器と土器に分布の偏在は認められず、混在した状況である（図版2-2）。

土器は遺物集中範囲全体にわたり接合関係がみられる。ほぼ完形の無文土器は遺物集中と同じ高さから出土したが、炉址上位にあたる位置から横倒して検出された（図版2-4）。炉址にはわずかな土器片が遺存していたが、この土器片と住居址第2層出土の土器破片が接合した。覆土上層出土の土器片は炉址出土の土器片と同様赤化しており、炉体土器として用いられている土器片が抜取られた後、覆土上層に廃棄されたものと考えられる。覆土上層に廃棄された炉体土器の破片は他の遺物と混在した状況で出土していることから、他の土器と共に廃棄された状況であると思われた。

遺物 土器は深鉢で占められ、小型深鉢1点が出土している（図版2-4）。完全に遺存していたものではなく、全ての深鉢に欠落部分が認められ、接合作業により器形が復元し得た土器は僅かである。また土器破片には同一個体とみるべき破片が少ないとあるあるいは皆無である資料が含まれている。土器では沈縫文系が多くを占め、繩文を地文とするものがわずかに伴う。無文の土器破片も多数出土したが多くの縫片であり、明らかに



第1号居住址土層概要

- ①灰褐色土。埴りがない。ローム粒子を少量含む。
- ②灰褐色土。ローム粒子、1cm以下のロームブロック、炭化物を少量含む。
- ③灰褐色土。ローム粒子、1cm以下のロームブロック、炭化物を少量含む。
- 第1号居住址住居跡概要
- ④灰褐色土。ローム粒子、ロームブロック、炭化物の微粒子、埴土粒子を少量含む。
- ⑤灰褐色土。粘性が強い。埴土粒子、埴土ブロックを多く含む。ローム粒子を少量含む。
- ⑥埴土。
- ⑦暗黄褐色土。ローム粒子、1cm以下のロームブロック、埴土粒子を多く含む。
- ⑧暗褐色土。ローム粒子、埴土粒子を多く含む。
- ⑨暗褐色土。ローム粒子、ロームブロック、埴土粒子を少量含む。
- ⑩暗褐色土。ローム粒子、ロームブロック、炭化物を少量含む。
- ⑪暗黄褐色土。ローム粒子、5cm以下のロームブロックを多く、炭化物を少量含む。

第5図 第1号住居址(1/60)と炉址(1/30)

無文土器と判断できたものはが址上位から出土した光形の土器のみである。

石器は黒曜石剥片、碎片57点を主体とし、調整加工のある剥片4、両極打法により製作された石器7点、堆積岩、火成岩の剥片6点、打製石斧破損品2点、石匙破損品1点が出土していることから、石器製作に伴い生じた石器、破損した石器が廃棄されたものと思われる。他に石匙1点、使用痕のある剥片1点が出土している。

出土土器の特徴から中期初頭の住居址であると考えられる。

第2号住居址（第6図、図版3-1～4）

検出状況 試掘調査時に尾根北側肩から検出された（第3図）。O11グリッド周辺に位置する。遺跡内基本土層第5層に構築された住居址であるため、検出状況がよくない。

遺構の構造 平面形はほぼ円形であると考えられたが、調査中に確実な壁の立上がりを把握することはできなかった。長径約5mを測る。住居址西側に張り出しが認められた。この張り出した部分には、覆土とは色調などが異なる土層が堆積していた。埋甕、炉址との位置関係からみて、柄鏡形住居址の張り出し部であるとも考えられたが平面形をつかみきれず、本住居址が柄鏡形住居址であるかについては保留しておきたい。土層断面観察によると、床面上に覆土とは色調等が異なる土層が観察された。この土層を調査したところ、当初観察された住居址平面形とは一致する掘り方が検出された。

主柱穴は住居址壁下に巡り、P₂からP₁₅が柱穴にあたるものと思われる。柱穴間隔が狭いP₂とP₁₅にあたる部分が出入口に相当するものと思われる。

炉址は住居址中央からやや埋甕寄りに設けられている。上面には礫が集積されており、炉燃焼部上位の第②層を塞ぐかの様な状態であった（第6図、図版3-3）。が址上面の礫集積遺構の上位から、わずかな範囲ではあるが焼土が検出されている。焼土の一部が礫を覆うことから、礫の集積が行なわれた時点以降に、焼土が堆積あるいは形成されたものであると考えられる。礫集積の下部からは、炉の燃焼部と炉石の抜き取り痕と思われる掘り方が検出されたが、一部を確認したのみである。炉燃焼部から炉石抜き取り痕にかけての範囲に、最大で約10cmの厚さをもつ焼土が形成されていた。焼土は下部に向うに從って色調が薄くなっていく。

床面は軟弱で検出が困難であり、炉址周辺でやや明瞭であったものの掘り方全体にわたる検出はできなかった。床面直上からわずかな鉄平石が検出されたが敷石の痕跡であるか否かは判断できない。

住居址西側張り出し部付近から埋甕が検出された。試掘調査時に上半部を重機により破壊してしまったことから、構築時の土器の状態は不明であるが、土器底部は完全な形で遺存し、埋甕に用いられた深鉢の口縁部が床面より上位に突出した形で押設されていたことが、土層断面の観察により判明している。

遺物の出土状況 覆土の遺存状況が悪く、遺物出土量は僅かである。敲石1点と黒曜石製の両極打法により製作された石器1点が埋甕内部から出土した（図版3-4）。

遺物 埋甕は曾利系土器である。覆土出土の土器は曾利系、唐草文系、繩文を地文とする土器により構成される。覆土出土の遺物は繩文を地文とするものが多く、曾利系と唐草文系土器は少ない。唐草文系土器の出土量が少ないと見られる点では、棚細遺跡出土土器群の分析で指摘されている点と共通する。覆土出土の石器1点、埋甕出土の敲石の他は、剥片・碎片など石器製作に関わる黒曜石製の石器で占められている。

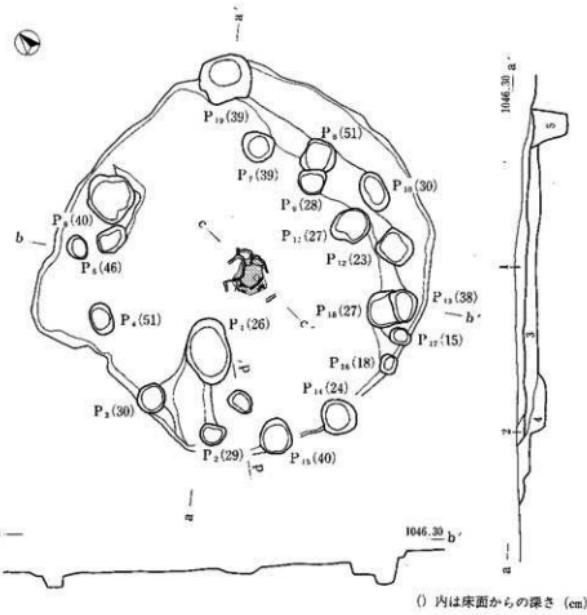
埋甕の特徴から中期末葉曾利V式期の住居址であると考えられる。

2. 竪穴

第1号竪穴（第5図）

検出状況 第1号住居址調査中に南壁外側から検出された。

遺構の構造 壁以外に検出できた遺構はなく、性格時期などは不明である。

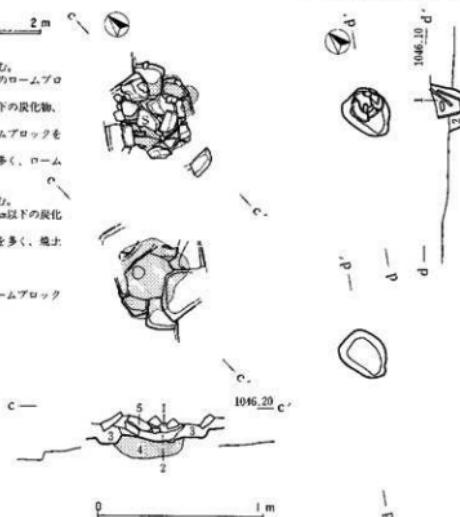


第2号住居址土層概観

- ①黒褐色土。ローム粒子、炭化物を少量含む。
- ②茶褐色土。ローム粒子を多く、5mm以下のロームブロックを少々含む。
- ③暗褐色土。ローム粒子を多く、5mm以下の炭化物、2mm以下のロームブロックを少々含む。
- ④黄褐色土。ローム粒子、1cm以下のロームブロックを多く含む。
- ⑤褐色土。1cm以下のロームブロックを多く、ローム粒子を少々含む。
- ⑥灰褐色土。ローム粒子を少々含む。
- ⑦第2号住居址炉址上層地盤
- ⑧茶褐色土。ローム粒子、炭化物を少量含む。
- ⑨暗褐色土。ローム粒子、発土ブロック、5mm以下の炭化物を少々含む。
- ⑩茶褐色土。ローム粒子、ロームブロックを多く、地土粒子を少々含む。
- ⑪砂。
- ⑫暗褐色土。ローム粒子を少々含む。
- ⑬暗褐色土。ローム粒子、1cm以下のロームブロックを少々含む。
- ⑭小わらわのローム層。

第2号住居址埋蔵土層観察

- ①黒褐色土。
- ②暗褐色土。



第6図 第2号住居址(1/60)と炉址および埋蔵(1/30)

3. 集石

第1号集石（第7図、図版4-1）

検出状況 尾根北斜面N～O22グリッドに位置する（第3図）。表土剥ぎ作業中に検出され、残念ながら集石上部を調査中に破壊してしまった。

遺構の構造 集石には亜円碟、亜角碟が用いられている。碟27個以上から構成され、下部に円形の掘り方を有する。層上は2層に分類できる。分類の基準は炭化物の量であり、第②層には多量の炭化物が認められた。掘り方は漸移層中に構築され、平面形はほぼ円形で底面長径68cm、短径61cm、確認面での長径79cm、短径72cm、確認面からの深さ18cmを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。北に第1号焼土が検出されており、相互の関連が考えられたが、関連性を示す積極的な根拠は見出せなかった。

4. 焼土

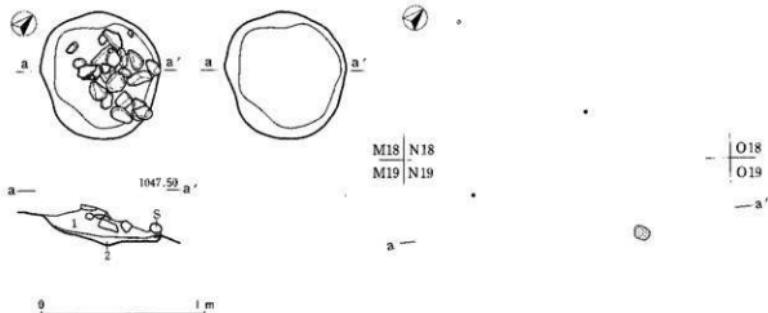
第1号焼土（第7図、図版4-2）

検出状況 尾根北斜面から検出された。O19グリッドに位置する（第3図）。耕作土直下から検出されたため遺構と認定し、周辺の精査を行なった。

遺構の構造 焼土の発達は弱く、色調もやや赤味が弱く橙色に近い。周辺からは少量の遺物が出土している。また焼土の南に位置する集石と関係するものと考えられたが、遺物包含層が遺存する範囲が限られていたことなどにより、関連を裏付ける根拠は見出せなかった。

遺物の出土状況 遺物の高さは焼土とはほぼ一致するが、焼土との関連性を示すものはない。周辺から中期初頭土器破片と黒曜石製剝片・碎片3点と両極打法により製作された石器1点が出土している。遺物の分布は散漫である。

遺物 焼土周辺出土土器は中期初頭に属すが、焼土との関連は曖昧である。



第1号集石土層概要

- ①均質土。ローム粒子、1cm以下のロームブロックを少量含む。
- ②赤褐色土。5mm以下の炭化物を多く、ローム粒子、1cm以下のロームブロックを少許含む。
- 第1号焼土層概要
- ①茶褐色土。練りがない。茶褐色土を痕跡に含む。
- ②赤褐色土。マルチ、石灰粒子を少許含む。耕土。
- ③高飛色土。5mm以下の炭化物を少量、5mm以下のロームブロックを極に含む。遺構内土層第3層と非常に似ている。但しローム粒子を少許含む点で基本層(?)と異なる。
- ④暗褐色土。遺構内土層第4層と同じ。

第7図 第1号集石 (1/30) と第1号焼土 (1/60)

5. 土 坑 (第8・9図、図版4~6)

第1号土坑 (第8図、図版4-3)

検出状況 試掘調査時に遺跡内基本土層第6層で確認された。G39グリッドに位置する(第3図)。

遺構の構造 坑底は遺跡内基本土層第6層中に掘り込まれている。平面形はほぼ円形である。壁面と坑底の境界が不明瞭であり、壁面は外傾する。坑底長径77cm、短径64cm、確認面での長径95cm、短径87cm、確認面からの深さ28cmを測る。覆土上部はレンズ状堆積である。

遺物の出土状況 第①層と第②層の境界から疊1点が検出された。

第2号土坑 (第8図、図版4-4)

検出状況 周辺が削平されており遺跡内基本土層第6層で確認された。C~D39グリッドに位置する(第3図)。

遺構の構造 坑底は遺跡内基本土層第6層中に掘り込まれている。平面形はほぼ円形である。壁面の一部がオーバーハングしている部分が認められ、断面形はフラスコ型を呈する土坑であると思われる。坑底長径97cm、短径89cm、確認面での長径108cm、短径98cm、深さ確認面からの深さ21cmを測る。

遺物の出土状況 遺物は出土していない。

第3号土坑 (第8図、図版4-4)

検出状況 周辺が削平されており遺跡内基本土層第6層で確認された。C38~39グリッドに位置する(第3図)。

遺構の構造 坑底は遺跡内基本土層第6層中に掘り込まれている。平面形は横円形である。壁面と坑底の境界が明瞭で、壁面は直立する。坑底長径101cm、短径81cm、確認面での長径105cm、短径84cm、深さ17cmを測る。

遺物の出土状況 遺物は出土していない。

第4号土坑 (第8図、図版4-5)

検出状況 G29~30グリッドに位置する(第3図)。

遺構の構造 坑底は遺跡内基本土層第6層に達する。平面形はほぼ円形である。壁面と坑底の境界が明瞭で、壁面は外傾する。坑底長径94cm、短径92cm、確認面での長径105cm、短径103cm、深さ20cmを測る。覆土上層はレンズ状堆積である。

遺物の出土状況 中期初頭の土器破片が出土した。他に黒曜石碎片1点がある。

第5号土坑 (第8図、図版4-6)

検出状況 F29~30グリッドに位置する(第3図)。試掘調査により一部破壊した。

遺構の構造 坑底は第6層に達する。平面形はほぼ円形で、壁面と坑底の境界が明瞭であるが、第5層中の壁面は崩落しているものと思われる。覆土は第①層がレンズ状堆積である。坑底長径92cm、短径88cm、確認面での長径110cm、短径108cm、深さ確認面からの深さ32cmを測る。

遺物の出土状況 小疊1点が坑底上5cmから出土している。他に中期初頭土器破片、黒曜石製石器各1点が出土している。

第6号土坑 (第8図、図版4-7)

検出状況 D~E30グリッドに位置する(第3図)。

遺構の構造 坑底は第6層上面に設けられている。平面形はほぼ円形である。壁面と坑底の境界が明瞭で、壁面が直立する。坑底長径97cm、短径95cm、確認面での長径134cm、短径122cm、深さ30cmを測る。覆土上層はレンズ状堆積である。

遺物の出土状況 中期初頭に属す土器破片が第①層確認面から出土した。土器破片のうち相互に接合するものはない。土器破片断面が風化していないことから、重機表土剥ぎ作業により紛失した可能性が高い。

第7号土坑（第8図、図版4-8）

検出状況 F～G28グリッドに位置する（第3図）。

造構の構造 坑底は第6層上面に設けられている。平面形はほぼ円形である。壁面と坑底の境界は明瞭であり、壁面は外傾する。坑底長径85cm、短径73cm、確認面での長径95cm、短径86cm、深さ25cmを測る。

遺物の出土状況 中期初頭土器破片が1点、剝片が1点出土している。

第8号土坑（第8図、図版5-1）

検出状況 造構の一部が搅乱により破壊されていた。I 28グリッドに位置する（第3図）。

造構の構造 平面形はほぼ円形である。壁面と坑底の境界は明瞭で、壁面は外傾する。坑底長径24cm、短径23cm、確認面での長径36cm、短径35cm、深さ29cmを測る。

遺物の出土状況 遺物は出土していない。

第10号土坑（第8図、図版5-2・3）

検出状況 G～H25グリッドに位置する（第3図）。第15号土坑を切る。

造構の構造 坑底は第6層に掘り込まれている。平面形はほぼ円形であり、壁面と坑底の境界が明瞭である。壁面は直立するが、第5層中の壁面が崩落したためか外傾する。覆土上層はレンズ状堆積であり、第②層にロームブロックが多く含まれている。坑底長径104cm、短径91cm、確認面での長径138cm、短径116cm、深さ41cmを測る。

遺物の出土状況 中期初頭の大型破片が出土した。他に土器破片が少量出土した。

第11号土坑（第8図、図版5-4）

検出状況 H～I 24～25グリッドに位置する（第3図）。

造構の構造 坑底は遺跡内基本土層第6層中に掘り込まれている。平面形はほぼ円形である。壁面と坑底の境界が明瞭で、壁面は外傾する。第5層中の壁面は崩落したためか強く外傾している。覆土上層はレンズ状堆積を示し第④層と第⑤層にロームブロックが多く含まれる。坑底長径108cm、短径103cm、確認面では径159cm、深さ46cmを測る。

遺物の出土状況 多量の土器破片が覆土内に散在する。第④層下部から出土したものが多い。土器破片は中期初頭に属す。

第12号土坑（第8図、図版5-5）

検出状況 H～I 27～28グリッドに位置する（第3図）。造構の一部を試掘調査時に破壊している。

造構の構造 坑底は第6層中に設けられている。覆土上層はレンズ状堆積を示す。平面形は円形で、断面形はフ拉斯コ状を呈する。坑底長径86cm、短径80cm、確認面での長径103cm、短径97cm、深さ35cmを測る。

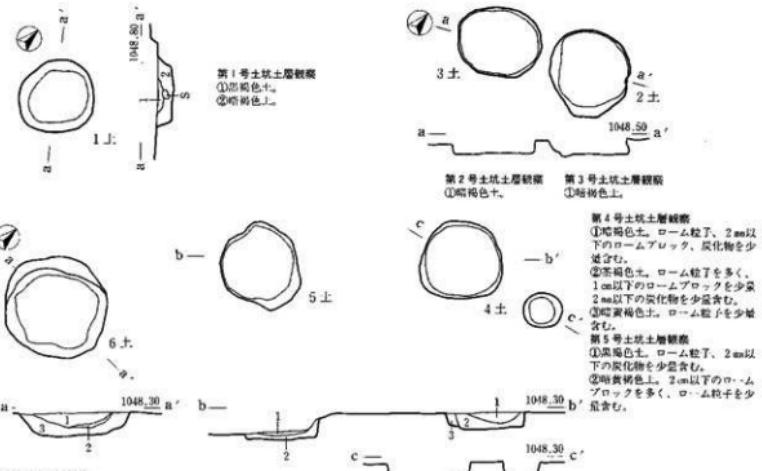
遺物の出土状況 中期初頭土器破片が覆土内に散在し、坑底直上から石礫1点が出土した。他に黒曜石製剝片・碎片2点と、碎片1点が出土している。

第14号土坑（第8図、図版5-6）

検出状況 F24グリッドに位置する（第3図）。

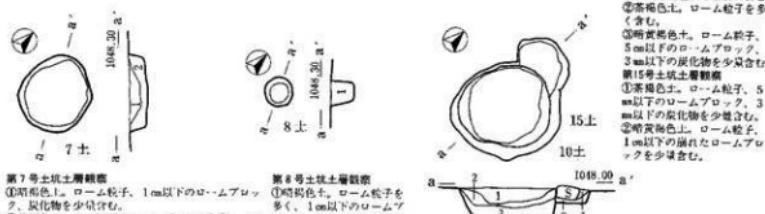
造構の構造 坑底は遺跡内基本土層第6層中に掘り込まれている。平面形はほぼ円形である。断面形は外傾するが、第5層中の壁面は外湾している。坑底から所謂坑底ピットが検出された。坑底長径96cm、短径20cm、確認面での長径149cm、短径74cm、深さ93cmを測る。坑底ピットは3基検出され、最も深いもので確認面から112cm、坑底から19cmを測る。

遺物の出土状況 出土遺物はない。



第6号土坑土壤剖面

- ①暗褐色土。ローム粒子、3mm以下のロームブロック、炭化物を少食む。
- ②暗褐色土。ローム粒子を少食む。
- ③茶褐色土。ローム粒子を多く、赤褐色粒子を稀に含む。



第7号土坑土壤剖面

- ①暗褐色土。ローム粒子、1cm以下のロームブロック、炭化物を少食む。
- ②茶褐色土。1cm以下のロームブロックを多く、ロームブロック、3mm以下の炭化物を少食む。



第11号土坑土壤剖面

- ①暗褐色土。ローム粒子を少食む。
- ②暗褐色土。ローム粒子、1cm以下のロームブロック、5mm以下の炭化物を少食む。
- ③茶褐色土。ローム粒子、1cm以下のロームブロック、3mm以下の炭化物を少食む。
- ④暗褐色土。ローム粒子、1cm以下のロームブロック、3mm以下の炭化物を多く含む。
- ⑤茶褐色土。ローム粒子、2cm以下のロームブロックを少食む。
- ⑥暗褐色土。暗褐色土。縁があり、粘性がない、1cm以下のロームブロックを多く、ローム粒子を少食む。2mm以下の炭化物を稀に含む。

第8図 土坑(1) (1/60)

第15号土坑（第9図、図版5-2・3）

検出状況 G～H25グリッドに位置する（第3図）。第10号土坑に切られており、遺構の規模は不明である。

遺構の構造 坑底は遺跡内基本土層第6層上面に設けられている。平面形はほぼ円形か橢円形であったと思われる。壁面と坑底の境界が明瞭で、壁面は外傾する。覆土上層はレンズ状堆積を示す。

遺物の出土状況 やや偏平で大きな礫が出土した。礫は第②層に乗るような状態で出土した。坑底より4cm上位の位置にある。他に中期初頭土器破片が礫とほぼ同じ高さから出土した。

第16号土坑（第9図、図版5-7）

検出状況 F22～23グリッドに位置する（第3図）。遺構の一部が道路建設のため削平されている。

遺構の構造 坑底は遺跡内基本土層第6層に達する。平面形はほぼ円形である。壁面と坑底の境界が不明瞭で、壁面は外傾する。遺跡内基本土層第5層中の壁面は強く外傾している。覆土はレンズ状堆積を示す第③層に、三角堆積土とみられる第②層がある。深さは40cmを測る。

遺物の出土状況 中期初頭土器破片が出土した他、黒曜石製剝片・碎片が3点出土している。

第17号土坑（第9図、図版5-8）

検出状況 H～I21～22グリッドに位置する（第3図）。

遺構の構造 坑底は遺跡内基本土層第6層に達している。平面形はほぼ円形で、壁面と坑底の境界が不明瞭である。壁面は直立するが、第5層中の壁面は崩落したためか外湾している。ロームブロックが少量含まれる第④層の上に、ロームブロックを多く含む三角堆土であると考えられる第③層がある。坑底長径70cm、短径66cm、確認面での長径110cm、短径100cm、深さ35cmを測る。

遺物の出土状況 中期初頭土器破片が出土している。他に黒曜石製調整加工のある剝片1点が出土している。

第18号土坑（第9図、図版5-8）

検出状況 I21グリッドに位置する（第3図）。第①層は擾乱された土層であり、壁面の一部が破壊されている。

遺構の構造 坑底は遺跡内基本土層第6層に達している。平面形はほぼ円形で、壁面と坑底の境界は不明瞭である。壁面は外傾するが、第5層中の壁面は崩落したためか外湾する。第⑤層はロームブロックを多く含み、三角堆土を形成している。覆土上部はレンズ状堆積を示す。坑底長径97cm、短径82cm、確認面での長径136cm、短径111cm、深さ35cmを測る。

遺物の出土状況 中期初頭土器破片が2点出土した。

第19号土坑（第9図、図版6-1）

検出状況 I～J21グリッドに位置する（第3図）。第20号土坑に切られる。

遺構の構造 坑底は遺跡内基本土層第6層上部に設けられている。平面形はほぼ円形である。壁面と坑底の境界が不明瞭で、壁面は外傾する。第④層が三角堆土を形成し、覆土上部はレンズ状堆積を示す。坑底長径85cm、短径69cm、確認面での長径101cm、短径82cm、深さ35cmを測る。

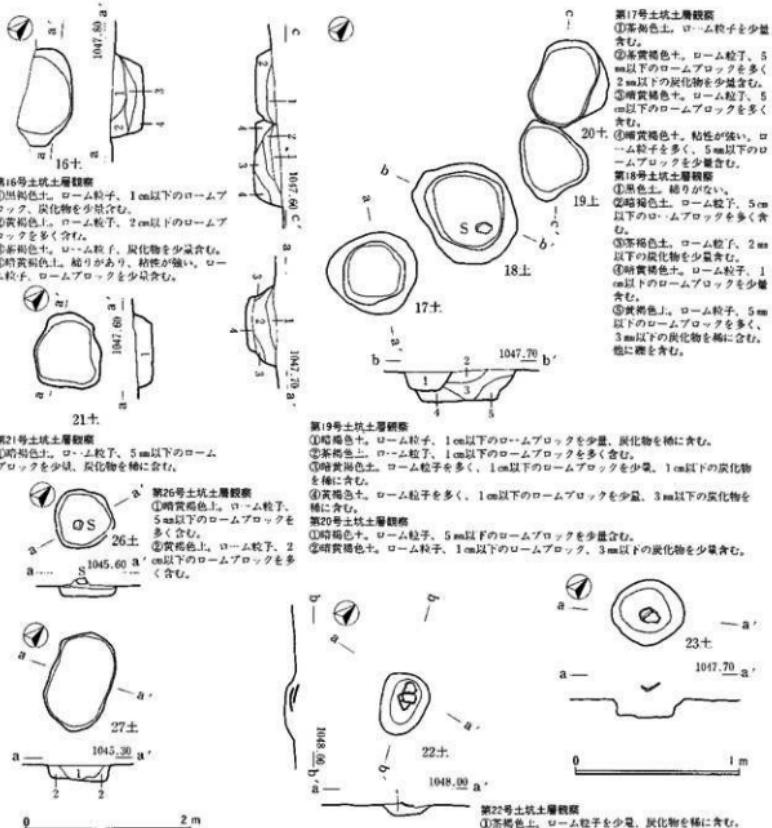
遺物の出土状況 土器破片1点が出土したが、土器の時期は不明である。

第20号土坑（第9図、図版6-1）

検出状況 I～J20グリッドに位置する（第3図）。

遺構の構造 坑底は第6層に達する。平面形はほぼ円形である。壁面と坑底の境界は不明瞭で、壁面は外傾する。坑底長径98cm、短径66cm、確認面での長径109cm、短径90cm、深さ26cmを測る。

遺物の出土状況 遺物は出土していない。



第9図 土坑(2) (1/60)

第21号土坑（第9図）

検出状況 F～G21グリッドに位置する（第3図）。

遺構の構造 平面形は乱れた円形で、壁面と坑底の境界は明瞭である。壁面は直立するが上部で一部外溝する部分がある。三角堆土は観察できず、覆土は1層である。坑底長径82cm、短径78cm、確認面での長径98cm、短径84cm、深さ24cmを測る。

遺物の出土状況 遺物は出土していない。

第22号土坑（第9図、図版6-2）

検出状況 H25グリッドに位置する（第3図）。

遺構の構造 坑底が第4層中に設けられている。平面形はほぼ楕円形である。壁面と坑底の境界が不明瞭で、壁面は外湾する浅い皿状の土坑である。坑底長径56cm、短径33cm、確認面での長径78cm、短径58cm、深さ6cmを測る。

遺物の出土状況 中期初頭の大型土器破片が重なった状態で出土し、ほとんどの土器破片が接合した。

第23号土坑（第9図）

検出状況 I 24グリッドに位置する（第3図）。

遺構の構造 坑底は第6層に掘り込まれている。平面形はほぼ円形である。壁面と坑底の境界は明瞭で、壁面は直立する。覆土にロームブロックを含み、埋めもどした土坑であると思われる。坑底長径63cm、短径54cm、確認面での長径88cm、短径80cm、深さ11cmを測る。

遺物の出土状況 中期初頭土器の底部が直立する状態で出土した。土器表面は赤化と剥落が著しく、熱を受けたものと考えられる。

第25号土坑（第8図、図版4-5）

検出状況 G 30グリッドに位置する（第3図）。

遺構の構造 平面形はほぼ円形である。壁面と坑底の境界は不明瞭で、壁面は外傾する。坑底長径33cm、短径32cm、確認面での長径48cm、短径42cm、深さ22cmを測る。

遺物の出土状況 遺物は出土していない。

第26号土坑（第9図、図版6-3）

検出状況 H 4グリッドに位置する（第3図）。

遺構の構造 第5層中に坑底が設けられた土坑である。平面形はほぼ円形である。壁面と坑底の境界が不明瞭で、壁面は外傾する。坑底長径64cm、短径62cm、確認面での長径76cm、短径73cm、深さ13cmを測る。

遺物の出土状況 第1層から礫が出土した。出土位置は坑底上15cmである。

第27号土坑（第9図、図版6-4）

検出状況 第6層上面で確認された。G 3グリッドに位置する（第3図）。

遺構の構造 平面形は乱れた楕円形である。壁面と坑底の境界は明瞭で、壁面は直立する。三角堆土が形成されている。坑底長径112cm、短径69cm、確認面での長径123cm、短径75cm、深さ21cmを測る。

遺物の出土状況 遺物は出土していない。

遺物出土状況と土坑の時期 土坑出土土器の大部分が中期初頭の土器であることから、土坑の大半が中期初頭に属するものと考えておきたい。出土土器の大半が小破片であり、器形を保ったままの土器が埋設されたと思われる土坑は第10号、第22号、第23号土坑の3基に過ぎない。第22号土坑は土坑の形状が他の土坑とは掛け離れており、用途差があることを想定できる。また第23号土坑出土土器は被熱痕が顕著であることから、住居址土器埋設炉である可能性も考えられたが、柱穴などが検出されなかったため、土坑として取扱った。礫を出土した土坑が4基あるが、礫は土坑中央の覆土上部、特に土層の境界から検出される傾向がみられる。特に第15号土坑は他の土坑に比べ比較的小さい土坑であるが出土した礫は大きく、重いものである。

土坑の分布 土坑は尾根平坦部から西斜面にかけて検出され、特に第1号住居址周辺に偏る傾向を示す。第1号住居址西側の土坑群は、遺構がみられないほぼ円形の空間をはさむように分布する。第1号住居址周辺の土坑群とは約16mの距離をおいて第1号、第2号、第3号土坑からなる土坑群が検出された。この土坑群からは遺物が出土せず遺構の時期が不明であり、遺跡内に複数の土坑群が同時に群在していたとは言いきれない。

第IV章 まとめ

北山菖蒲沢B遺跡の調査は、来年度も引き続行なわれる。ここでは本年度調査により明らかになった問題点を記し、来年度の調査の指針としたい。

1. 先土器時代から縄文時代早期の遺跡群

芹ヶ沢区および金山区には現在も豊富な湧水が点在し、古くから人間が生活するのに適した環境であったことが予想される。このような背景から、本遺跡周辺には先土器時代から縄文時代早期の遺跡が比較的多く残されている。北山菖蒲沢B遺跡においても先土器時代の石核と押型文土器が出土し、先土器時代から縄文時代早期にわたり生活の場として利用されてきたことが判明した。

北山菖蒲沢B遺跡の土層堆積状況と先土器時代遺物の出土位置から考えて、本遺跡周辺に先土器時代遺跡が検出できる可能性は高く、今後調査を行なう場合その存在に十分注意して調査を行なわなければならない。縄文時代草創期から早期の遺跡に関して同じことがいえる。広井出遺跡第9号住居址出土の尖頭器など草創期の遺物である可能性が認められるものがあることから、草創期の遺跡が検出できる可能性は皆無とは言えない。残念ながら北山菖蒲沢B遺跡からは早期の遺構が発見されなかったが、周辺には早期の遺跡である北山菖蒲沢A遺跡と広井出遺跡があり、来年度調査を含め今後遺物ブロックなど生活の場を示す遺構の検出に努めることが必要である。

2. 縄文時代前期末葉から中期初頭にかけての集落遺跡

北山菖蒲沢B遺跡から検出された遺構の大部分は、縄文時代中期初頭に位置するものである。本年度調査地点北方には北山菖蒲沢A遺跡があり、縄文時代前期末葉の集落遺跡であることが判明している。北山菖蒲沢A遺跡と北山菖蒲沢B遺跡はほぼ連続して営まれた遺跡であり、当該期の遺跡群としては桜木地区种田町C遺跡を中心とする遺跡群と並び、縄文時代前期末葉から中期初頭の遺跡群研究の上で良好な資料であると考えられる。

北山菖蒲沢B遺跡から湧水点をはさんだ東側の尾根にも、中期初頭の遺物が出土することが確認されており、同じ中期初頭という短い時間幅の中で、尾根単位の居住のあり方を解明する上でも注目すべき遺跡であると考えられる。

3. 点在する縄文時代中期末葉の小規模遺跡

芹ヶ沢区、金山区における縄文時代遺跡の時期別分布をみると、縄文時代中期後半以降の遺跡が希薄であることが指摘できる。本年度の芹ヶ沢地区における発掘調査において、縄文時代中期末葉曾利V式期の遺構が北山菖蒲沢B遺跡、北山菖蒲沢A遺跡で検出された。『調査第一卷』地名表における北山村ベッタ草の傳手式土器の記述、平成6年度の広井出遺跡発掘調査における第59号土坑の存在を考え合わせると、本地域にも縄文時代中期末葉から後期前半の集落遺跡の存在が予想されるものと思われる。特に北山菖蒲沢A、北山菖蒲沢Bの2遺跡では試掘調査も含めた約40,000m²にわたる調査において2基の住居址が検出されたのみであり、その分布密度の希薄さが大きな特徴であるといえる。点在する小規模遺跡の存在は、縄文時代中期末葉における集団構成を語る上で貴重な資料となるものと思われる。

本報告書では本年度調査した埋蔵文化財の記録のうち、遺構について報告するにとどまった。本年度調査において出土した遺物および遺構と遺物の関係については、来年度調査成果とあわせて、後日報告をしていきたいと考えている。

引用参考文献

(1) 遺跡内容の記述、用語に関しては以下の文献を参考にした。

- 鳥居龍藏 1921 「諏訪史第一巻」
- 守矢昌文 1986 「第一章第四節 八ヶ岳山麓古地の遺跡」
- 宮坂虎次 「第二章第一節 奉科・霧ヶ峰山麓の遺跡」『茅野市史 上巻』茅野市教育委員会
- 小林健治 1994 『広井出遺跡』茅野市教育委員会
- 戸沢光則監修 1994 『國文時代研究事典』東京堂出版
- (2) 藤岡忠雄 1986 「第三章 弥生時代」『茅野市史 上巻』茅野市教育委員会
- (3) 柳川美司 1994 「第IV章第1節 稲田頭C遺跡周辺における平安時代後期の散在居住地群について」『稲田頭C遺跡』茅野市教育委員会
1995 「第IV章第2節 平安時代後期の散居型集落の性格について」『稲田頭A遺跡』茅野市教育委員会
- (4) 守矢昌文 1990 「柳加遺跡における縄文土器群の構成について」『柳加遺跡』茅野市教育委員会
- (5) 守矢昌文 1994 「國文時代中期初頭における柳川頭C遺跡周辺の遺跡の展開について」『柳川頭C遺跡』茅野市教育委員会

図 版



△1. 北山菖蒲沢B遺跡遠景。右手前の尾根は北山菖蒲沢A遺跡。

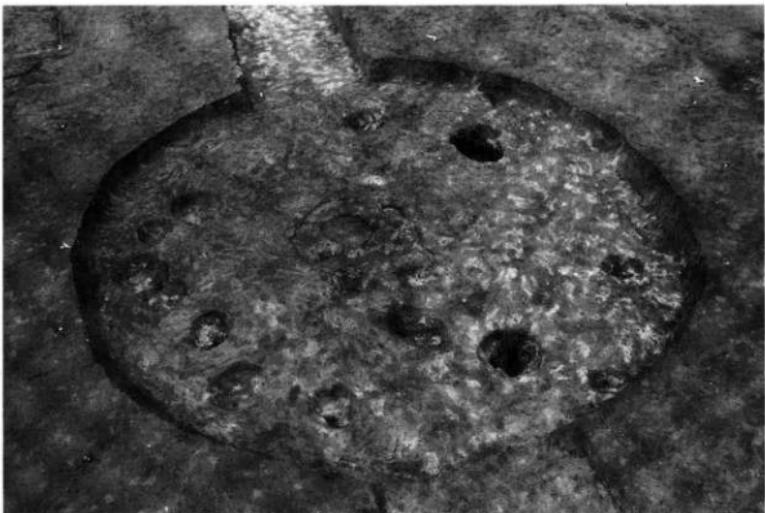


△2. 西斜面削平状況
(南より)



△3. 溽水のある谷
(北より)

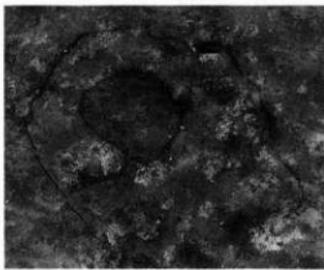
図版 2



△1. 第1号住居址。床面を検出した状態（西より）



△2. 第1号住居址遺物出土状況
(南より)

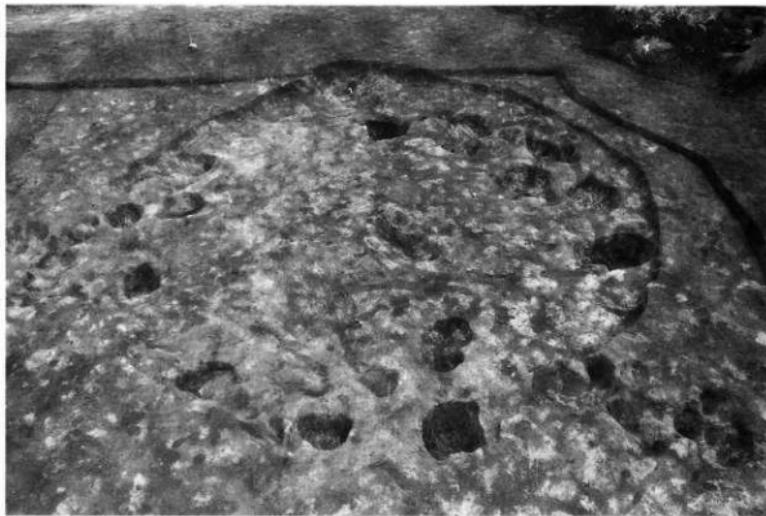


△3. 第1号住居址炉址検出状況（西より）

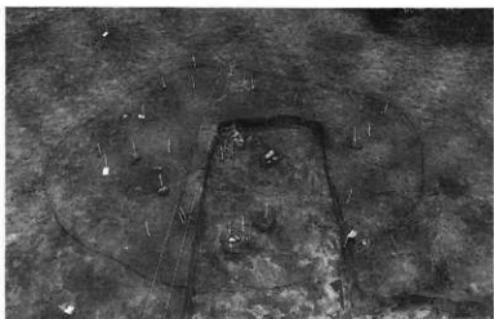


△4. 無文土器出土状況（南西より）

図版 3



△1. 第2号住居址（南西より）



△2. 第2号住居址検出状況
(南西より)



△3. 第2号住居址が址上面の礫(南西より)



△4. 第2号住居址埋窓(南西より)

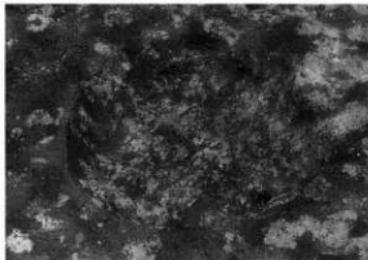
図版 4



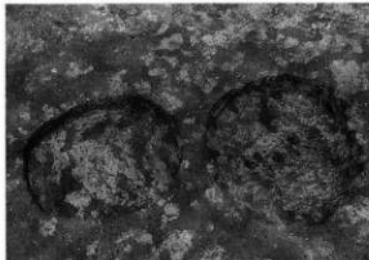
△1. 第1号集石（東より）



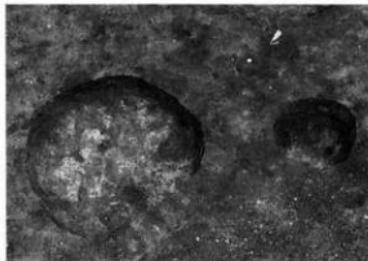
△2. 第1号焼土周辺（南西より）



△3. 第1号土坑（南より）



△4. 第2号（右）、第3号土坑（南より）



△5. 第4号（左）、第25号土坑（南より）



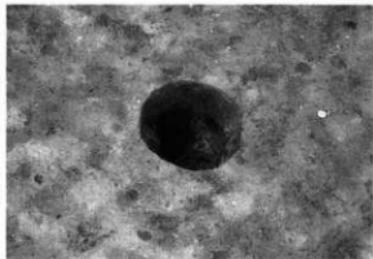
△6. 第5号土坑（南より）



△7. 第6号土坑（西より）



△8. 第7号土坑（南西より）



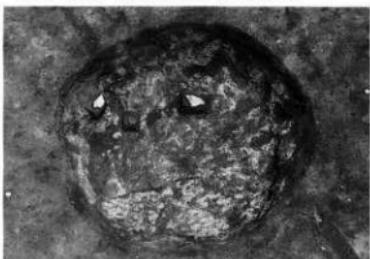
△1. 第8号土坑（西より）



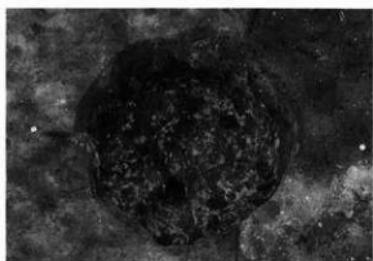
△2. 第10号（左）、第15号土坑（東より）



△3. 第10号（手前）、第15号土坑（南より）



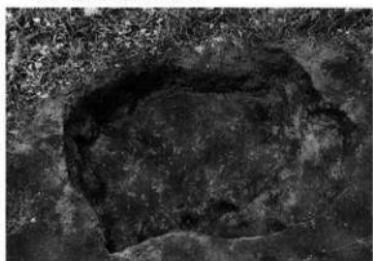
△4. 第11号土坑（南より）



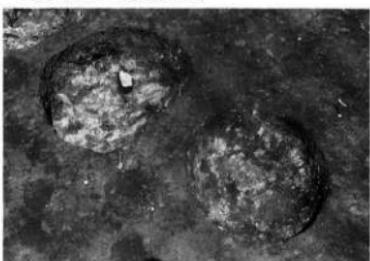
△5. 第12号土坑（南より）



△6. 第14号土坑（南より）

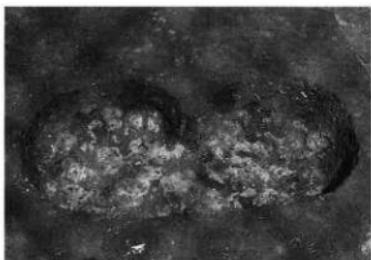


△7. 第16号土坑（西より）



△8. 第17号（右）、第18号土坑（西より）

図版 6



△1. 第19号(右)、第20号土坑(西より)



△2. 第22号土坑遺物出土状況(南西より)



△3. 第26号土坑(南東より)



△4. 第27号土坑(南より)



△5. 第1号住居址周辺調査風景(北西より)



▷6. 八ヶ岳総合博物館指定学級



△1. 調査区全景（北東より）



△2. 調査区全景（南より）

報告書抄録

ふりがな	きたやましうぶざわ						
書名	北山菖蒲沢B遺跡						
副書名	平成7年度県営圃場整備事業芹ヶ沢地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
編著者名	功刀司						
編集機関	茅野市教育委員会						
所在地	〒391 長野県茅野市塚原二丁目六番一号 TEL (0266) 72-2101						
発行年月日	西暦1996年3月22日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
きたやましうぶざわ 北山菖蒲沢 B	茅野市北山 7653番地他	20214	237		19950530～ 19950707	1,490m ²	県営圃場整備 事業芹ヶ沢地 区に伴う発掘 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
北山菖蒲沢 B	集落址	先土器時代 縄文時代早期		先土器時代石核 縄文時代早期土器 中期土器・石器	少數の土坑を伴う 小規模な集落跡。		
		中期	遺物ブロック1基 住居址 2基 土坑24基集積1基 焼土 1基				

北山菖蒲沢B遺跡

——平成7年度県営開拓整備事業芦ヶ沢地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

平成8年3月21日 印刷

平成8年3月22日 発行

編集 茅野市教育委員会
発行 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
☎ (0266) 72-2101㈹

印刷 はおづき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5
☎ (026) 244-0235㈹
